

「道の駅ましこ」 益子町地域振興拠点施設



道路側夜景

review

選評

プロポーザルコンペ時に、建築主の町長は「土地から生えてきたような」建築の提案を求めたというエピソードがこのプロジェクトの全てを言い尽くしているように思える。

益子町の中心から五キロほど離れた里山を背景とする田園部の県道が交差する位置に、道の駅の建設が構想された。この道の駅には、まちの玄関口として益子町の魅力を発信するとともに、スーパーマーケットなどの生活インフラが不足する周辺地域への暮らしのサポートを担うことも期待されていた。

益子町は陶芸をはじめとする民芸運動が盛んな土地柄である。この地域の文化力を活かし、数多くのワークショップを開催して計画に町民の意見を反映するとともに、施工にも地元職人の参加の機会をつくり、運営も地元住民による第三セクターが担うなど、企画・設計・施工・運営の各段階で一貫して住民参加を導入している。そのため、単なる地場産品を提供する営利施設ではなく、文化施設的な性格を併せ持つことへと展開し、さらに両者の相乗効果が生まれている。

設計者は、「土地から生えてきたような」建築の実現のため、かたちや素材を周囲の風景から再発見し、それを反復する切妻屋根の大架構で再構成した。里山の山並みに呼応する屋根並みは「八溝杉」という町有林の木材による集成材で、最大スパン三二材におよぶ。スパンの大小にあわせて梁成を変えてはならず、梁ピッチを変えられることにより構造的合理性を確保し、設計上の自由度を得ている。そのため、基本設計段階で集成材の発注・制作を行い、工事年度前に伐採・乾燥・集成材化が行われた。

屋根並みの重なり合う部分はハイサイドライトとなり、明るい光が降り注ぐとともに、山並みの風景が屋内に飛び込んできて、山並みと屋根並みの呼応するようなりズムは心地良い。また、床や壁に地場の陶土が使われ、周囲の田園や山並みとシームレスにつながっている。

配置計画は駐車場の海に浮かぶ島のようなりがちな従来の道の駅ではなく、駐車場を建築



南方、浅間山からの俯瞰

〈2018年 第59回 BCS賞受賞作品〉太田市美術館・図書館／高知県立高知城歴史博物館／コープ共済プラザ／新豊洲Brillia ランニングスタジアム／すみだ北斎美術館／洗足学園音楽大学 Silvermountain&Redcliff (e-cube)／空の森クリニック／高崎アリーナ／多治見市火葬場華立やすらぎの杜／立川市立第一小学校・柴崎学習館・柴崎図書館・柴崎学童保育所／デンソーグローバル研修所・保養所「AQUAWINGS」／日本無線先端技術センター／パナソニック スタジアム 吹田／羽田クロノゲート／益子町地域振興拠点施設「道の駅ましこ」／〔特別賞〕名駅一丁目計画 (JRゲートタワー、JPタワー名古屋)



BCS賞は、建築の事業企画・計画・設計、施工、環境とともに、供用開始後1年以上にわたる建築物の運用・維持管理等を含めた総合評価に基づいて選考し、建築主・設計者・施工者の三者を表彰する建築賞です。この賞は、1960年にはじまり2018年で59回を数えます。



建築主より

Message from Client

益子町長
大塚朋之 Tomoyuki Ohtsuka

田んぼの中の道の駅

「田んぼの中に『道の駅』をつくっても人は来ないよ」。建設に際しては多くの心配の声がありました。

しかし現在は、目の前に広がる田んぼと里山の風景こそが道の駅の宝物。カフェの中から、または芝生にゴザを敷いてのんびりと田園風景を多くの来訪者が楽しんでいます。またその光景により、私たち町民が、地元の価値を再認識しております。

「道の駅」に求めるのは「益子らしさ」であり、ゆえに益子町のブランディングでもあります。その想いを受け止め、百点満点以上の仕事をしてくださりました設計・施工にあられたすべての関係者の皆さまへの感謝を忘れることなく運営をまいります。



設計者より

Message from Architect

株式会社マウントフジアーキテクトスタジオ一級建築士事務所
主宰

原田真宏 Masahiro Harada

益子らしいもの

益子らしいもの、がコンペ当初からテーマとして設定されていました。この土地らしさとは特徴である周囲の山並みと連なるルーフスケープや、木材や土といった地場の材料によるデザインに象徴的に現れていますが、それに加えて「この風土の中で生きる私たちとは一体何なのだろう」と皆が考え続けるプロセス自体にもあったように思っています。益子をその摇篮の地とした「民芸」がそうであったように、土地や生業を含んで持続していくプロセス群として建築を捉えることが大切だと考え、建設準備委員会がそのまま運営主体となる仕組みや、関わる方々の意見を柔軟に取り入れられる構築システム(ex.スパン変化に梁成でなくピッチで応じる)、地元職人・業者の工事参画、DIY可能な什器デザイン等々を採用してきました。その結果として、町の皆が、自分たちが生み、育てていると思える「正しい意味での公共建築」となることができたようです。この受賞を励みとしてそんな「公共」の探求を続けたいと思います。



施工者より

Message from Builder

株式会社熊谷組
首都圏支店 建築部第1工事部 作業所長

曾我智宏 Tomohiro Soga

チーム一丸となり「これがすべて」と誇れる建物

設計者から、工事着手にあたり説明会を開くので元請のみならず実際に作業を行う職人の方を出来るだけ多く集めてほしいと依頼がありました。その説明会で地元職人の参加や地元産材の活用など、本プロジェクトの目的や建物の特性をお聞きし、全員でチームとしての方向性を共有することができました。

工事期間中は幾度か厳しい局面がありました。特に、この建物の最大の見せ場となる144本からなる集成材梁の施工及び精度管理の検討には多くの時間を費やしましたが、まさに全員のチームワークと結束力で乗り切ることができました。

すべての仕様・納まりについて妥協を許さず協議を行い、一つひとつ解決し、建物の完成を迎えた時は心から「これがすべてだ」とチームと言えるものが出来上がったと誇りに思いました。ここに本プロジェクトに携わったすべての皆様に改めて感謝申し上げます。



1. 地元で採れた新鮮な農産物が並ぶ。 2. 展示スペース
3. 型鋼サッシの納まり 4. 地場の陶土による土壁と三和土

益子町地域振興拠点施設 「道の駅ましこ」計画概要	
● 建築主	益子町
● 設計者	(株)マウントフジアーキテクト スタジオ一級建築士事務所
● 施工者	(株)熊谷組
● 所在地	栃木県芳賀郡益子町 長堤2271
● 竣工日	2016年9月6日
● 敷地面積	18,011㎡
● 建築面積	1,595㎡
● 延床面積	1,328㎡
● 階数	地上1階
● 構造	鉄筋コンクリート造

背後に置き、前面の田園と背後の里山をこの建築が仲介するような関係性を構築している。また、縦割り行政の弊害を受けやすい外構計画についても設計者がデザイン監修にあたることで、芝生広場や親水公園が本計画と一体的に整備されている。

施設運営は建築計画時からワークショップに参加していた住民が中心となった第三セクターが担い、外部テナントに頼ることなく自主運営している。経営的にも順調とのこと、開業一年後の実績は事業シミュレーションに比較して来場者数で二倍、売上で一・五倍の伸びを示していると同った。

「土地から生えてきたような」建築は、地元のみなさんに愛され、益子の地にしっかりと根をはり、豊かな土壌を育んでいくことだろう。

【選考委員】 後藤春彦・能勢修治・栗山茂樹